



東京部会(第78回)

日時:	2015年10月8日(木) 19:00-21:00
場所:	日本大学経済学部本館2階中2会議室
参加者:	[順不同・敬称略] 篠原総一(京都学園大学)、宮尾尊弘(筑波大学名誉教授)、加藤一誠(慶應義塾大学)、石山晴美(東京証券取引所)、鈴木深(東京証券取引所)、大倉泰裕(千葉県立松戸向陽高)、杉田孝之(千葉県立津田沼高)、塙枝里子(都立府中東高)、升野伸子(筑波大学附属中)、三枝利多(目黒区立東山中)、星典男(鎌倉市立大船中)、高橋信弘(筑波大学院)、新井明(上智大学)、以上13名

【内容要旨】

(1) 宮尾尊弘先生(筑波大学名誉教授)が、アメリカから帰国され、約一年ぶりに参加された。宮尾先生は冬の経済教室の講師を担当する予定で、先生から、講義の概要の説明があった。

講義内容は、大きく二つに分かれ、第一部では第1部「学習のあり方:主体的に学ぶ態度と課題解決型の能力の育成」というテーマで、カリフォルニアの2つの大学で試した結果を踏まえた、中高でも応用可能な方法である。主な項目と講義予定の内容、およびポイントは以下のとおり。

1-1:「イシュー」(論点)から始める教え方。

「市場」「自由貿易(TPP)」などについて異なる見方や立場を対比させて興味を持たせる。通常「問題」と訳されるイシュー(論点・論題)とプロブレム(課題)を区別して、前者のイシューから始めて、異なる意見を自由に生徒に発言させる。課題を与えて解決策を探るだけでは不十分。論点を議論する中で、新たな論題や課題を見つけさせることも重要。

1-2:「情報リテラシー」の育成の重要性。

「現状認識」(例えば、食料自給率の低下)と「価値判断」(望ましいかどうか)を峻別する能力を養成。経済学の特徴である現状分析(実証経済学)と価値判断(厚生・規範経済学)の区別を議論の中で学び利用する能力(本来の意味の「情報リテラシー」)を養う。

1-3:生徒どうしの対話・討論の促進。

ディベート方式の採用と、意見や立場の違いの理由を見つけ、教科書を批判的に読ませる。討論することで自己学習による「認知能力」(ハードスキル)を高めるとともに、人間形成に必要な「非認知能力」(ソフトスキル)である社会性、批判力、共感力等を育成する。

1-4:努力と進歩の評価とフィードバック。

生徒自身のために「自己採点」のテストを頻繁に行い、努力と進歩を適切に評価する。テストは2本立てで、生徒自身が学ぶ上で効果が高い「自己採点テスト」と生徒を評価するための本テストを頻繁に行い、生徒の努力と進歩を評価して、やる気を起こさせる。

ここでは、アメリカの二つの大学の受講学生の規模によって、うまくゆくケースとなかなか難しいケースの二つが紹介されて、大人数でのディベートの方法などの開発が課題であるとの問題提起も行われた。

第2部「公共経済学を教える方法」は、昨年の秋の経済教室で紹介されていることもあり、概要の紹介がされた。これは、クラス実験を中心とした教授法で、やはり中高でも利用できる教材の提供を目指したものである。内容は以下の通り。

2-1:クラスで「公共」や「協力」の概念を教える問題点。

クラスメートとしての建前の「公共」「協力」ではなく、個人としての本音の「競争」を再現する。顔の見える少人数のクラスでは「非協力」な態度をとりにくいことが問題。現実の経済社会で個人がとる行動様式を再現して、「公



共」や「協力」を現実的に議論すべき。

2-2: 簡単な「じゃんけんゲーム」による準備。

ゲーム感覚で自然な競争心をかきたてて、経済社会での「個人主義的」な行動を自覚させる。「囚人のジレンマ」を組み込んだ「じゃんけんゲーム」の詳細はYouTubeにある経済教室を参照。

2-3: より現実的な「公共財ゲーム」の実施方法。

クラスの中で「社会」を再現して、その中で「公共」や「協力」の実現の難しさを実感させる。経済的な意味のある「公共財」を扱うゲームを通じて「協力」の重要性を学ぶ。これもYouTubeの経済教室参照。

2-4: 結果の議論による「公共」と「協力」の意味の理解。

実験を踏まえて、現実の経済社会で、いかに「公共」や「協力」を実現させるかを議論させる。以上のゲームを通じて、現実の社会経済では「公共」を実現するような「協力」がいかに難しいかを実感した上で、どうしたら公共的な財やサービスを効率的に生産・配分できるかを議論する。政治的決定、政府の役割の必要性や重要性を議論して、「公共」の科目で取り上げられるはずの政府、政治、選挙などの内容につなげる。

宮尾先生からは、2-3のゲームでは、顔が分からないこと、個人にインセンティブをつけて繰り返しの囚人のディレンマゲームを行わせ、そこから協力の難しさを実感させることが大切との指摘がされた。

質疑では、一部で紹介されたテストの方法と現実性、情報リテラシーの概念の問題、 이슈をどう見つけるか、非協力ゲームは教室で再現することは日本では困難ではないか等の疑問や質問がだされ、宮尾先生からは、それぞれ回答がされた。

篠原先生からは、これまでの教育は答えが分かっているものをどうやって教えるかに関心をむけていたが、今必要なのは 이슈をどうみつけるか、答えのわからない問題に取り組ませること、それをカリキュラム化することが課題だとのコメントがされた。それをうけて、宮尾先生からは、その点を強調しつつ、マイクロ経済の分野や他の分野をいかに教えるべきかについての提案を冬の教室では行いたいとのコメントがあった。

多くの質問や疑問がだされた報告であった。これらの質問などを踏まえて、次々回12月の東京部会に宮尾先生が出席されるので、そこでさらに議論を深め、1月の冬の教室を充実したものにしてゆくことが確認された。

(2) 各地の部会の報告が、篠原代表からあった。

①札幌部会に関しては、1月30日(土)行われる、冬の経済教室in札幌の内容概略がきまったこと、中学教科書の検討プロジェクト、高校入試問題のプロジェクトが札幌部会を中心に展開されることが報告された。

②京都部会、大阪部会に関しては、京都部会での上畑直久先生(京都市立栗陵中)開発の授業実践プラン「生活設計・マネープランゲーム」を大阪部会でも検討して、よりよいものにしてゆくことができそうだとの報告がされた。

③中旬に予定されている名古屋部会に、札幌から兼間先生、東京から新井が参加することが報告された。

(3) 教材開発委員会からは、「時間の経済学」のワークシートの説明があった。

これは、夏の教室でも紹介された、塙枝里子先生(都立府中東高)が企画した授業案をもとにした、ワークシートである。授業のながれは、『レインボーニュース28号』(証券知識普及プロジェクト)に掲載されている授業紹介を参照してもらい、このワークシートを使いながら授業ができるような構想で作成したとのこと。内容的には、計算問題は応用として、どんな生徒でも取り組めることにしたとの説明があった。これを踏まえて、さらに時間を組み込んだ(例えば利子の考え方)経済の授業を組み立てることを目指したいとの話もだされた。

(4) 実践情報関係からは二つの報告があった。



①升野先生(筑波大学附属中)から、同中学の入試問題の紹介があった。学習指導要領の枠内で、かつ思考力を見る問題を工夫して出題しているとのことである。選択問題でも、しっかり作れば、単純な知識問題を超越のものもできる例として参照してほしいとのことであった。

②新井から、経済教育学会で報告した、学術会議の参照基準を巡る議論の紹介とその時のレポートが紹介された。

今月の部会は、宮尾先生の参加を得て、問題提起とそれを巡る質疑、討論が行われ、充実した部会を持つことができた。

記録と文責:新井

次回開催予定:11月26日(水)19:00~21:00。場所は日本大学経済学部本館2階会議室予定。議題は、冬の教室の内容、各種プロジェクト、教材開発の取り組みに関するディスカッションほか。